

## 福岡県における近代図書館の嚆矢—福岡図書館の設立背景

岡本雅享\*

### はじめに

2018年春に開館100周年を迎えた福岡県立図書館の館長室に「書」の文字を刻んだ鬼瓦と軒先瓦、軒丸瓦が飾られている。福岡市総合図書館の郷土・特別資料室の入り口にも、これと同じ軒先瓦が展示されている。明治35（1902）年10月に出雲大社福岡分院の初代分院長、廣瀬玄銀<sup>はるなが</sup>（1855—1916年）が境内で開館し、大正期まで続いた福岡図書館の瓦だ（図1）。同館を語る諸文献は「県立図書館に先行し、前身図書館の役割を担った」「福岡に図書館の灯を点じ、県立図書館の建設を導いた尊い礎」などと綴る<sup>1)</sup>。

この福岡図書館は、福岡における近代的図書館の嚆矢<sup>こうし</sup>として象徴的な存在であり、その蔵書が福岡県立図書館、九州大学附属図書館創設時の基盤図書として引き継がれた経緯からも、様々な文献で紹介されてきた。特に図書館学分野では注目を集め、筑紫豊「私立福岡図書館史」（『図書館学』第6号）や伊藤達也「（私立）福岡図書館についての一考察」（同第86・88号）など、すでに詳細な先行研究も蓄積されている。同館自体が発行した『福岡図書館報』（第1～3号）も九州大学及び福岡市内の公立



【図1】 福岡図書館本館に使われていた鬼瓦（上）と軒先瓦（中）と軒丸瓦（下）。福岡県立図書館所蔵。

\* 福岡県立大学人間社会学部・教授

図書館に現存するため、その図書館としての実態は、ほぼ解明されているといってよい<sup>2)</sup>。だが伊藤論文が「おわりに」で「この時期に福岡図書館を成立させたものが何であったのか」と述べ、「福岡図書館設立の理由」を今後の課題に挙げるように、福岡における近代図書館の嚆矢が、神社の境内で開かれた要因は、不明とされてきた。一宗教家が福岡の旧藩関係者や神官らの協力を得て興した福岡図書館は、大橋図書館や南葵文庫、成田図書館など、当時資産家が設立した他の私立図書館とは設立の性格が異なるからである(図2)。その理由は福岡県内の状況や史料、図書館学の視点からは探りきれない。大社教とその創設者である千家尊福・第80代出雲国造、代々その千家家付の社家で筑前を檀所(布教担当地域)とした廣瀬家の歴史に関わることだからだ。本稿は、その設立背景と要因を整理することで、すでに一定の蓄積がなされてきた(私立)福岡図書館をめぐる研究の補充と発展に寄与したい。

### 1. 私立福岡図書館の概要—福岡県立図書館・九大図書館の基盤

まず先行諸文献から、私立福岡図書館の実態と社会的・歴史的意義を概観しておこう。

明治43(1910)年の『福岡県案内』は「県下各郡市に於て、既に図書館の設置せられたるもの五館あり、其図書は9万1122冊に達し、公衆閲覧の便に供ふ」として、私立の福岡、久留米、八女ほか2館を挙げるが、うち7万2442冊が福岡図書館の蔵書だった<sup>3)</sup>。福岡県内初の図書館は明治34年1月設立の久留米図書館だが、『福岡県教育百年史』は、前記三館中、福岡図書館の施設・設備・活動が最も充実し、図書館



【図2】 明治43年『福岡県案内』掲載の福岡図書館(大社教福岡分院境内)。左が本館、右が増築した洋館。左下の人物が初代分院長で図書館主の廣瀬玄銀。

に対する認識が一般に乏しく、県内でも図書館の設置が遅々として進まなかった時代に、その出現は図書館の何たるかを示し、設置気運を促進する上で大きく貢献したと評している<sup>4)</sup>。大正7(1918)年春に竣工した福岡県立図書館の蔵書数が同14年で5万4千冊というから、領ける話だ。蔵書も和漢洋書を揃え、丸善を通じて購入したエンサイクロペディア・ブリタニカやウェブスター大辞典も並ぶ全国的にも最高峰の水準だったとされる<sup>5)</sup>。

福岡図書館の開館式は明治35年10月17日午前11時、新築図書館の前庭に幔幕を張りめぐらした式場に、福岡市長や県・市議員など300人が参列して行われ、「福岡日日新聞」や「福岡県教育会々報」で大きく報じられた。開館式で公表した「福岡図書館来歴書」には

1. 本館は文学・法律・実業・医学・教育・理化学・其他百般の學術技芸に関する普通有益の図書は勿論、内外の図書新聞雑誌等を網羅し広く公衆の閲覧に供す

1. 本館は年令15才以上のものは何人と雖も来りて閲覧することを得

1. 図書閲覧室には婦人席の設あり  
 などあり、幅広い民衆の文化向上を目指していたことが分かる。

木造二階建ての本館は1階が受付と古器物の展示場、2階が閲覧室で、横長の大机と椅子で40人が一度に閲覧できた(図3)。明治40年、農業参考館を附設すべく二階建ての洋館を増築し、その2階に書庫を移して図書館の拡充も図った。15年間で延べ3万人余が利用したが、1回3銭の閲覧料では経費の1割も賄えず、負債が嵩む。大正5(1916)年末の玄銀死去後、前(4)年の県議会で設置が決まった県立図書館が同7年春に竣工する中、その使命を終えるかの如く同6年に閉館した。蔵書の大半は県立図書館の基幹図書になったという<sup>6)</sup>。残った蔵書のうち1万余冊が同14年12月の玄銀十年祭にあわせ、九州大学に寄託され、廣瀬文庫となった。九州大学図書館は福岡県初の大学図書館として同14年6月に竣工したが、本館の書庫は当初がら空きだった。廣瀬文庫は、その新しい書庫に大量に収蔵された最初の図書で、九州大学図書館の基盤ともなったのである<sup>7)</sup>。

筑紫豊は「私立福岡図書館は、国においても県においても、まだ図書館界の進捗が遅々とし



【図3】『福岡図書館報』第1号(明治35年10月)掲載の「福岡図書館真景」。

ていた時代に、本県で最も規模の大きく内容の整った代表的な私立図書館として出現した」と述べ、伊藤達也も「大型の私立図書館が勃興した明治30年代に、九州で唯一本格的な私立図書館として福岡に開館した」とし、その福岡における歴史的社会的意義を評価している。

日本では明治31年11月の図書館令公布を契機に図書館への関心が高まり、南葵文庫(同32年・東京)や成田図書館(同34年・千葉)など、大規模な私立図書館が都市部で誕生した。これらの図書館は、設立者が外遊し、当時欧米で盛んだった公共図書館に直接接触したことで、私費を投じて設立したという共通点があったが、福岡図書館は違う。福岡における近代図書館の嚆矢であり、福岡県立図書館や九州大学附属図書館の基盤ともなった(私立)福岡図書館が、なぜ大社教福岡分院の境内で、宗教家によって設立されたのか。その背景を知るために、いったん福岡から出雲へ視点を移したい。

## 2. 第80代出雲国造・千家尊福と大社教

出雲大社は古来一般に、出雲国風土記(733年)や延喜式神名帳(10世紀前半)が記す杵築<sup>えんぎ じんみょう</sup>大社<sup>きづきの おおやしろ</sup>の名で呼ばれてきた。公称が出雲大社に変わったのは明治4(1871)年である。古事記(712年)や日本書紀(720年)の神話にも登場する大社の創建は、有史以前に遡る。戦後日本では「大社」と称する神社が増えたが、大社は本来、巨大な神殿を意味し、延喜式神名帳が全2861社中「大社」と記すのは杵築大社だけだった。古来、その大社の宮司を担ってきたのが、古代王の末裔とみられる出雲国造(家)だ。

出雲国造は延暦17(798)年に政治的権力を失って以降、杵築大社の祭祀<sup>さいし</sup>に専念する。古代

から出雲臣<sup>おみ</sup>を姓としてきたが、14世紀半ばに千家・北島両家に分かれて大社の宮司を分担し、幕末に至った。原武史『<出雲>という思想』は、明治初期の日本における出雲国造は天皇と並ぶもう一人の生き神で、天皇に匹敵する宗教的権威をもっていたという。明治23(1890)年、第81代尊<sup>たかのり</sup>紀国造に謁見したラフカディオ・ハーンも、ダライ・ラマに比肩する生き神であると、世界に発信している<sup>8)</sup>。

明治期に大社教を創設した千家尊福は、弘化2(1845)年生まれの第80代出雲国造である<sup>9)</sup>。王政復古・祭政一致を掲げて徳川幕府を倒した明治政権は、当初神道国教化路線をとり、明治5年6月に27歳の尊福を、国民教化を担う全国教導職(14階級)の最高位・大教正と、(全国3府72県のうち)1府36県の神道教導職を統括する神道西部管長に任命した(図4)。同年11月、父尊澄<sup>たかすみ</sup>(第79代国造)から国造職を譲りうけた尊福は翌6年正月、列島各地に広がる出雲講などの信者団体を結集して出雲大社敬神講を組織し、歴代国造の中で初めて、自ら列島各地を幅広く巡教する。生き神視された尊福の説く教えは、各地で熱狂的に迎えられた。尊福は同年9月に敬神講を改組して近代的な出雲大社教会を立ち上げる。その後、改組をへて明治15年に誕生した大社教は、大正2(1913)年段階で「教師の職にあるもの4187人にして協賛員1万4892人を算し、教徒433万6649人の多数を有す。本祠の外に東京分祠ありて全国を二分し……分院20箇所、教会所170箇所あり」という教勢に至った<sup>10)</sup>。同年の日本の総人口は5336万人だから、全人口の1割近くが大社教の信徒だったことになる。

国民教化を担う政府教部省は明治6年1月、東京に教導職の養成機関・大教院を置き、府県



【図4】 第80代出雲国造千家尊福(1845~1918)、出雲大社山口分院所蔵。

ごとに中教院、府県下各地に小教院を設けて全国的な布教体制を整えようとした。大教院から中小教院の設置を委ねられた尊福は同年11月、大社庁舎内に仮中教院を設けて民衆への布教を始める。この時期、その教化・布教活動の一環として尊福が行った先駆的な文化活動が、福岡図書館の淵源となる。

尊福はまず、新政府が初参加したウィーン万国博覧会(5月~10月)に合せる形で出雲大社博覧会を主催した。明治6年3月から準備を始めた尊福は、開催前に出した「出雲大社博覧会<sup>ひんこく</sup>稟告」で「博覧の会たるや人の知見を広め、才識を開き、其の益甚大なり……来る五月十日よ

り三十日まで……会場を大社境内に設け、大社の神物宝品……を始めあまね普く陳列し「共に開明の境域に進歩せんと欲す」と広報している。同年5月7日教部省に届け出、翌8日、権禰宜の廣瀬綱銀（玄銀の父）らが出雲大神にその開催を奏上する祭典を執行した後、陳列にかかり、10日から開始した。この博覧会では大社神事所、（現神楽殿一帯を含む）千家邸、乗光寺の三会場で、大社や県内の社寺、諸家が提供した名宝、什器、書画数百点を展示し、乗光寺では動植物の観覧や物品の即売会も催された。同時に煎茶書画会、芝居や相撲、競馬や浄瑠璃の興行もあり、境内は多くの人で賑わったという<sup>11)</sup>。

尊福がこの時期に行った、もう一つの先駆的な文化活動が、図書館の開設である。図書館としょかんという文字と読み方は、明治32（1899）年の図書館令の公布以後に定着した名称である。当初は新聞・書籍の縦覧所などと呼ばれた。明治7年4月、大社は布教・教化の一環として境内の文庫を書籍縦覧所しよつかんとし、一般にも開放した<sup>12)</sup>。尊福は前年11月松江で開設された書籍縦覧所を見て、大社でも、と思ったのだろう。島根県庁による同縦覧所は、境二郎権参事の布達に「文部省書籍館しよじやくの体裁を模倣し……小学校内の修道館書生寮を以て書籍縦覧所と為し」とあるように、近代的公立図書館を志向していた。

大社の仮中教院内縦覧所報告は「従来、出雲大社神庫に蓄蔵する皇（和）漢洋の書籍は申すに及ばず、大宮司千家尊福その他神官の収蔵少なからず……開明文運日進のご時節に当り……之に依り人才教育文化進歩の裨益あらん事を計り、この度仮中教院内に書籍並びに日誌新聞紙縦覧所を設け」たので「神官・僧侶は勿論、士民一般有志」も利用するよう呼びかけている。寛文7（1667）年の遷宮で建設された文庫は、



【図5】 明治初期、書籍縦観所として使われた大社文庫。江戸前期の建造で近年修復（出雲大社境内）。

造営予算の一部で買った神道書や、徳川光圀など諸家からの寄附・奉納書を所蔵していた。それに神社や社家が所蔵する書物を合わせ、神職・教導職の勉学や庶民の啓蒙に当てようとしたのだ（図5）。

この図書館は大祭や祝日のほかは毎日午前8時から午後4時まで開き、閲覧料は1日1銭、新聞は無料で閲覧できた。仮中教院から職員が交代で出て閲覧者の質疑に応ずる、司書に当たる仕組みも取り入れていた。明治5年8月設立の文部省書籍館（後の帝国図書館）から2年足らず、最も早期の近代的私立図書館事業だった。この先駆的な文化活動が大社教の教導職に受け継がれ、福岡における代表的近代図書館の嚆矢とされる福岡図書館を、大社教福岡分院境内で産み出すのである。

とはいえ読者にはまだ、明治7年に尊福が行った図書館活動が、28年の時をへて福岡へ伝播した経緯が見えないだろう。それを理解するためには、時代を近世に巻き戻し、千家国造家付の社家・廣瀬家と筑前福岡藩の重鎮・吉田家の近世来の縁に目を移す必要がある。

### 3. 出雲大社の廣瀬家と福岡藩吉田家の縁

大社では中世末頃から、社家のうち主に中官（中級神職）が各地への布教を担う御師となり、活動し始めた。御師は毎年同じ頃、祈祷された玉串（神札）や護符を持って檀所（檀場）と呼ばれる各自の布教地域を回り、神符の授布や祈祷を行って帰国する。檀所では出雲講きのえねや甲子講など信者の講社ができ、信者の出雲参りの際は屋敷（宿）に泊めて、参拝案内や祈祷の取次ぎをした。「出雲さん」や「（出雲の）大夫さん」と呼ばれた彼らは千家、北島両国造家を合わせて約50人（家）いた。その主な活動地域は一般に、明治初頭の段階で関東以西の27カ国と大阪・江戸と言われるが、陸奥（東北）や箱館・江差にも及んでいた。

北部九州は近世、出雲御師が活発に布教を展開していた地域の一つである。近年、北島国造付の社家で、豊前国小倉藩領一小倉城下と3郡237か村（1万3264軒）を檀所としていた田中数馬の旅日記が古代出雲歴史博物館の収蔵する所となり、御師の実態や、彼らが檀所の人々と良好な関係を築くために行った様々な努力が明らかになってきた<sup>13)</sup>。数馬の場合は小倉へ着くと、まず城下の武家屋敷と町年寄を訪ねて布教し、続いて町村の大庄屋や役人の所を廻った。町村では役人に護符などを渡し、住民への配付と初穂料集めを依頼し、お礼として出雲特産うつぶるいの十六島海苔や自家製の薬などを贈る。高額たかあきの御初穂を納めたり、配札によく協力してくれる篤志家たちには、国造真筆の和歌の短冊、色紙、掛け軸などを授ける場合もあった（図6）。

田中千海の俳号をもつ数馬は、豊前随一の歌人・国学者として名高い小倉藩士・西田直養なおかいら、地元の俳人らとも親交をもった。当時の武家や



【図6】 田中数馬の肖像（古代出雲歴史博物館提供）。

町村役人の間では、和歌や俳譜が必須の嗜みで、それらに秀でていれば、歌会や句会の席で一目置かれたのである。八雲俳壇そしゅうの四宗匠の一人に挙げられるほどの実力者だった数馬は、檀所で催される歌会や句会によく誘われ、庄屋から俳譜の添削を頼まれることもあったという。こうして町役人たちと懇意になった数馬一行の荷物は無料で村々を継ぎ送りされ、宿がなければ村役人が家に泊めてくれるほどの信頼を得た。このほか数馬は、京都郡・新津両手永みやこ（郡の下に置かれ、30村ほどを束ねた行政単位）の大庄屋の相談をうけ、出雲の糸引技術を豊前へ伝播する手助けもしている。出雲大神には農耕や殖産の神徳があると説くだけでなく、現実の生産向上に寄与する実践力も、檀所で御師としての人望を大いに高めたことだろう。

いっぽう現福岡県内のうち筑前を檀所としていたのが、千家国造付の社家、廣瀬家であった。福岡図書館を開設した玄銀は、その廣瀬家の17代目に当たる。文化15（1818）年2月の吉田家文書「出雲大社神主廣瀬家由緒書」や明治36年1月『福岡図書館報』掲載の「大社教福岡分院録事」をみると、廣瀬家が福岡藩の吉田家と

の縁を通じて、筑前で幅広く出雲信仰を広めていたことが分かる<sup>14)</sup>。

江戸中期、第12代の廣瀬信睦が長崎に逗留した折、長崎御番役（幕府に課せられた軍役）として滞在していた福岡藩の中老、吉田栄年（1685～1761）と出会い、文芸を通じて親しくなる。吉田家は藩主・黒田家の創業以来の家臣で、家老や当職（家老主席）を歴任していた。第6代の栄年は享保6（1721）年3月に中老、同12（1727）年8月中老となっているので、この間だろう。その後栄年は任期を終え福岡藩へ、信睦も出雲に帰ったが、老中に昇進した栄年は、かねての約束通り出雲に使いをやり、信睦を筑前に招いた。信睦は栄年の庇護の下、領内各地で大社の神符を頒布するようになる。

栄年が当職の座にあった頃（1730～44年）、国中が蝗害（バッタが稲などを食う害）に苦しみ、飢餓者が道端に溢れた。その時、信睦が蝗災を祓う祈祷札を福岡藩内に広く施し、黒田公も大社に祈祷札を納めたという。元文元（1736）年9月、福岡藩寺社奉行の四宮甚太夫から大社

社中廣瀬多門宛に届いた、稲虫除け御札の配札を認める書状がそれを裏付ける<sup>15)</sup>。廣瀬家は代々栄年の厚情を忘れず、何かと吉田家の安否を伺った。前述の文化15年吉田家文書には、第14代廣瀬右仲（玄長）が文化元（1804）年、博多妙楽寺へ栄年の墓参に訪れたともある。妙楽寺に栄年の供養料を供えるばかりか、廣瀬は嘉永6（1853）年には栄年の肖像を描き写し、神号を出雲国造より賜って自ら祭りたいと申し出た。

明治維新後、新政府が御師の廃止を打ち出したため、大社社家の廣瀬家と福岡藩の吉田家の関係は一旦途絶えるが、廣瀬家は明治10年代に入ると再び福岡で神符の頒布を始める。安政2年生まれの出雲玄長は明治10年代末、大社教の九州出張所を設けるべく、吉田家の誘いもあり、単身下関から干鰯船に便乗して博多港に着いたという。それは尊福が明治18年に行った大規模で長期にわたる福岡県下巡教と連動していた。



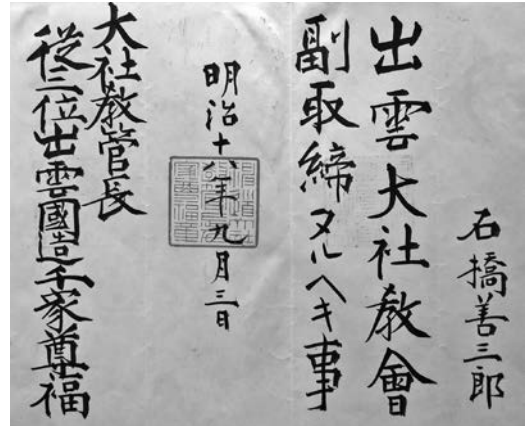
【図7】春日神社社殿の前面に並んで掛かる「出雲国造尊福謹書」と書かれた3枚の扁額（北九州市八幡西区藤田）。

#### 4. 福岡県内における大社教の布教

明治15（1882）年、大社教を立ち上げて初代管長に就いた尊福は、大社教東京分祠を創設し、関東や東日本における布教の足掛かりとした。そして越後（新潟）と筑紫（福岡）を皮切りに、自ら長期にわたる遠方への巡教に乗り出す。歴史や神話で出雲と縁の深い両地域を巡る旅は、感慨深かったのだろう。数ある巡教の中で、この2地域だけ、その様子を詠んだ歌集を出している<sup>16)</sup>。

その歌集『筑紫の道ゆきふり』や当時の『大社教雑誌』を見ると、明治18（1885）年7月19日、船6艘で馬関（下関）まで迎えに来た門司の神職らと合流し、関門海峡を渡った尊福は、門司における3日間の開教を皮切りに7月末まで今の北九州市域を巡った。27日の藤田の春日神社（現八幡西区）における開教では、境内が人で溢れ、千人近い信者が大社教に入ったという。尊福は歌集で「藤田村の（宮司）波多野熊宣は祖父の頃より我家と親しい」として「月日こそ遠く隔つれ古いにしへに変わらぬものは誠なりけり」と詠む。今も同社社殿に掛かる尊福揮毫の扁額「出雲大社」「大比叡神社」「須賀神社」は、布教に協力した熊宣の誠意に答えて贈ったものだろう（図7）。

藤田を出た尊福らは遠賀川を河口近くで渡り、響灘沿岸域を開教しつつ、宗像方面へ向かった。そこから玄界灘沿いを南下し香椎宮、はこさき筥崎宮に立寄り、8月末博多に至る。箱崎の浜で涼んだ夜、江藤正澄（1836～1911年）と再会した喜びを、尊福は「杯をとる手に月もさしそひて巡りあふ夜ぞ嬉しかりける」と詠った。正澄は廣瀬玄銀が終生兄事した人物である<sup>17)</sup>。秋月藩士時代に国学を学び、明治零年代前半は



【図8】 福岡県姪浜の石橋善三郎に出雲大社教会副取締を任命する明治18年9月3日付け書状（上）と尊福揮毫の大社御神号「大國主大神」の掛け軸（左）、石橋家所蔵。

神祇官（省）の官員を、後半は丹波国出雲神社（出雲大神宮）などの神官を務めた。九州大学附属図書館所蔵の江藤書翰集に明治5年1月、尊福が行う神葬祭をめぐり、当時神祇省権中録だった正澄に、玄銀の父・綱銀らが送った書状が残る。尊福が前（4）年春、東京で開いた歌会に、二人は同席していた。正澄は尊福や廣瀬家と10年を超える旧知の仲だったのだ。

正澄は明治11年、実父の死を機に帰国、官を辞し古書店を開く傍ら、福岡博物展覧会の開催や午報を鳴らす号報会社の設立、沖ノ島の神宝調査などで社会事業家、考古学者として名を馳



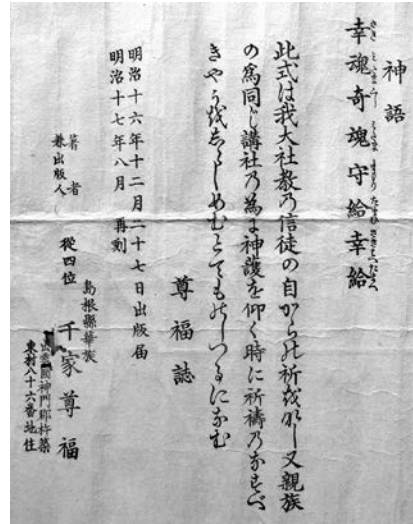


【図9】 糸島市二丈福井の白山神社の社殿に掛かる「大社御杖代兼国造出雲宿禰尊之」書の扁額。

せる。尊福は同20年4月、その正澄を大社教の権中教正（4級）に任じた。後に昇級を重ねて同33年に大教正となる正澄は、福岡における大社教の活動を終生支えた。大社教の教導職の最高位まで昇級した正澄も、晩年に自身の生涯を『大社教大教正江藤正澄履歴書』と題してまとめる（同42年）ほど、大社教に傾倒していたのである。

尊福の福岡巡教は明治18年12月初めまで続いた。9月には今の福岡市域を博多湾に沿って西へ移動する。博多湾に面する姪浜（福岡市西区）の旧家・石橋家では、石橋善三郎を出雲大社教会副取締に任命する同年9月3日付けの書状とともに、この時尊福が揮毫し、授けたとみられる大社御神号「大国主大神」の掛け軸を、今も大事に保管している（図8）。

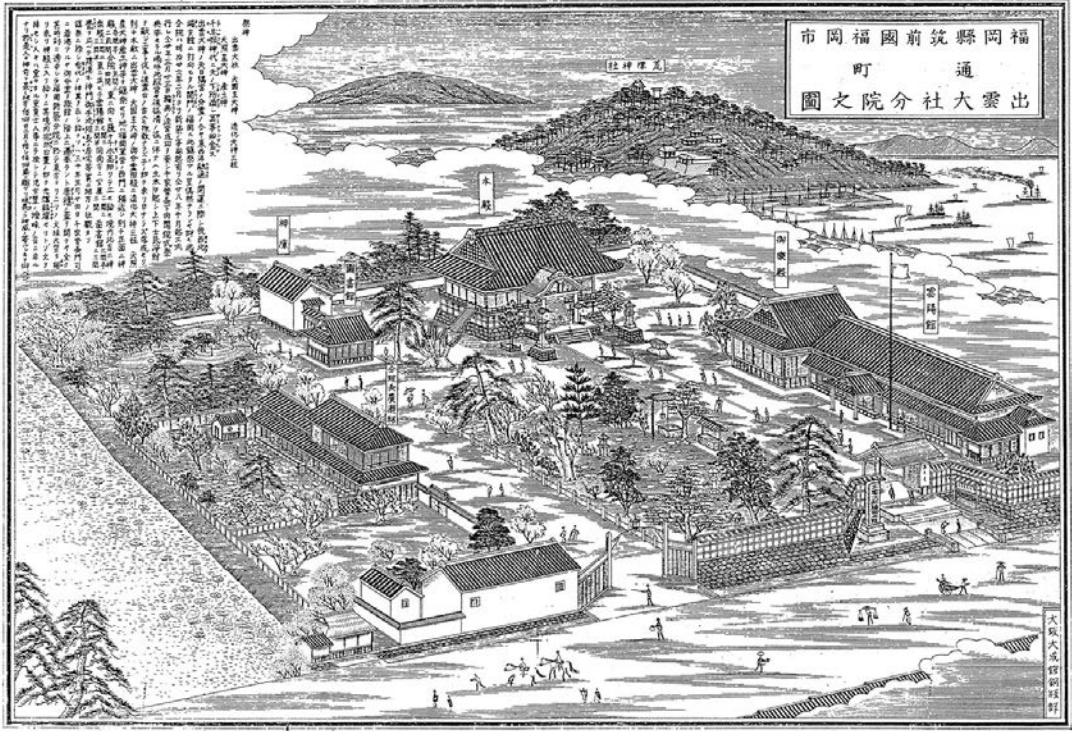
続いて訪れた糸島半島は、古代に出雲の玉作り工人達が住んでいたとされる潤地頭給遺跡があるなど、出雲との縁が深い地域だ。糸島市二丈福井の白山神社には「大社御杖代兼国造出雲



【図10】 明治16年に尊福が大社教信徒用に作成発行した祈祷文の末尾（糸島市志摩久家の生松天神社所蔵）。

宿禰尊之」と刻まれた扁額が掛かる。尊福の曾祖父、第77代国造（1795～1832年在職）の揮毫である（図9）。筑前が檀所の大社御師、廣瀬家がとりもった縁だろう。その糸島では、維新に際し怡土・志摩両郡（糸島市と福岡市西区）の祠官班頭職に任じられた宮崎元胤（大俊、1832～1900年）が、尊福らの巡教を支えた<sup>18)</sup>。糸島市志摩久家の生松天神社宮崎家文書に、尊福が明治16年末、大社教信徒用に作った祈祷文（家内安全・病氣平癒の祈念詞と神語）が残る。信徒に配るよう、尊福が元胤に託したのだろう（図10）。二丈白山神社の河上定徳宮司は同14年出雲刊行の和綴本『葬祭式』（同社所蔵）を筆者に見せながら、糸島の神葬祭は、今もほぼ大社教由来のものだと語られた。

糸島を後にした尊福一行は博多へ戻り、今度は御笠川沿いに南進して今の春日・太宰府市域で開教した。さらに筑後川北岸の朝倉市域などを巡り、11月には旧豊前国エリアの福岡県中・東部（今の田川・行橋市域など）で布教、12月



【図11】 明治31年刊行『大日本名所図録 福岡県之部』（大阪大成館編）掲載の「福岡県筑前国福岡市出雲大社分院之図」。

4日の鞍手郡で福岡巡教を終える。明治19年5月の『大社教雑誌』創刊号は、この福岡巡教で管長尊福の親教が125席に及び、5万人余が大社教に入り、1500余戸が神葬祭に改めたと記す。以降の号に出てくる巡教報道を見ると、尊福に続き同年秋には副管長・大教正の金子有卿が、豊前から肥後（熊本県）にかけて巡教した。尊福巡教の随行で熱心だった地元・田川郡の権中講義（大社教教導職10級）箕田軌に先発を委ね、大講義（7級）など教導職数名が有卿に随行している。同21年には大社教美作<sup>みまさか</sup>分院長で権中教正（4級）<sup>みかもまさとも</sup>の美甘政和が、4月初旬から7ヶ月近くかけて福岡県内を巡教し、豊後（大分県）の日田<sup>やばけい</sup>や耶馬溪筋の各村まで足を延ばした。政和の開講は延べ150余日・300回に及び、毎回数百人が参集したという。同22年3月には岡山分

院長で権少教正（6級）の松尾郡平が信徒の招きを受け福岡巡教へ赴いている。

こうして大社教の布教が福岡県内で普及していく中で、廣瀬玄銀は明治20年、荒戸町の旧吉田家屋敷300余坪を縁故払下げしてもらうなど、吉田一畝の協力を得て活動を始めた。江藤正澄が主導した荒津山（現福岡市西）公園の整備に協力などした後、同26年2月に分院新築を発起。大社教の千家尊愛<sup>たかあき</sup>管長を迎えて開院式を行ったのは同30年5月25日である。翌31年発行の『大日本名所図録』は、敷地700坪という分院の広い境内を今に伝えている（図11）。

## 5. 私立福岡図書館設立の理由

福岡図書館の創設は明治29（1896）年春、福

岡分院長となった玄銀と大社教教導職で「博多新聞」創業者の松田敏足<sup>としたる</sup>（1837～1913年）、江藤正澄、そして旧福岡藩士で国学者の海妻甘蔵<sup>かいづまかんぞう</sup>の4人で発起した。本館開館の当時、80才の高齢であった海妻自筆の漢文祝辞によれば「今を距ること7年、歳次丙申（明治29年）孟春、予広瀬社司を訪う。社司置酒す。予が語図書館に及ぶ。暗に社司の素懐に適す。社司大いに喜び、直に江藤六位を招く。会々松田教正来る、討議周密、予算粗定まる<sup>ほぼ</sup>」とある。いっぽう千家尊福は明治21年、伊藤博文の誘いを受けて政界に入り、貴族院議員となって院内会派を率いる一方、埼玉・静岡県知事をへて明治31年11月、東京府知事となり、明治末には西園寺公望内閣の司法相に就いた（ただし晩年は大社教に総裁として復帰し、生涯をかけて列島各地を巡教）。

明治32年11月の図書館令で私立図書館の設置が法制化されると、玄銀はかねてからの計画を一気に推し進めるべく、動き出す。同35年10月15日の福岡日日新聞の記事「福岡図書館設置の顛末」によれば、玄銀は同33年1月に東京へ赴いて1ヶ月滞在し、東京府知事と貴族院を兼任していた尊福や在京の黒田家、福岡出身の有力者らに協力を求め、文部省から105冊、黒田家から370余冊の寄贈を得、かつ大日本史等を購入し、東京帝国両図書館で組織法を学んで帰福し、これに自身の300余冊、江藤、海妻らによる寄贈書などを合わせ、基盤図書とした。文部省からの百余冊は以前、文部省普通学務局長（当時は文部大臣に次ぐ職位）の座にあった尊福の計らいであろう。

玄銀が神社の境内に図書館を建てた発想の源は、前述したように、その尊福が明治零年代後半、大社境内で行った文化活動にある。尊福が教導職の教化活動を展開すべく、明治6年5月



【図12】 福岡図書館和漢書目録（九州大学附属図書館所蔵・提供）。

に大社境内で開いた博覧会で、その祭典を執り行い、出雲大神に開催を奏上したのが当事権禰宜だった玄銀の父、第16代廣瀬綱銀だった。同年11月大社内に仮中教院を置いた尊福は、その文化活動の一環として翌7年春、境内で書籍縦覧所を開設し、神社や社家が所蔵する多量の書物を集めて神職・教導職の勉学や一般民衆の啓発に当てた。その方式が福岡図書館にも受け継がれている。玄銀は18、9歳の頃、尊福が教化の一環として行った、これら先進的な文化活動を間近に見ていたのである。

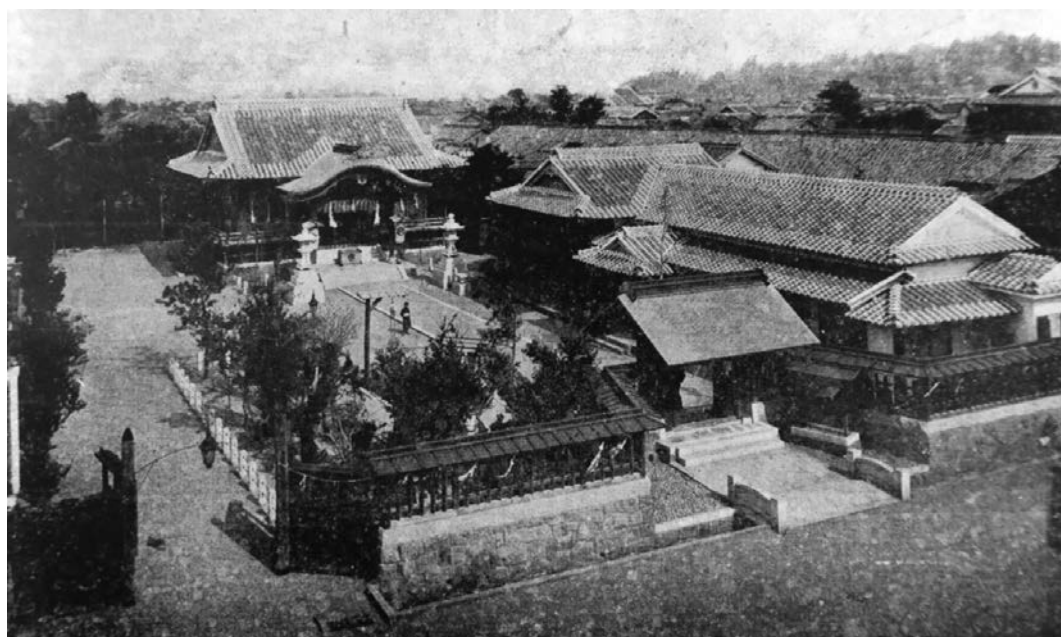
だが玄銀は単に尊福の真似をしたのではなく、大きく発展させた。福岡図書館の目録分類法は、明治33年、資金や図書の調達、帝国図書館視察などのため1ヶ月滞在した東京で、廣瀬自ら当時の代表的図書館学者、和田萬吉東大図書館長から直に学んだ最先端のものだった（図12）。尊福の後を継ぎ第81代出雲国造となった千家尊紀<sup>たかのり</sup>は、福岡図書館開館式の祝辞で「大社教に在り教義を弘布する者は常に進取の気象を奮起し社会の進運を幫助するの覚悟なかるべ

からず」と述べている<sup>19)</sup>。私財を投じ自ら奔走し、福岡に近代図書館を築いた玄銀は、生涯それを貫いたのだ。玄銀はこの図書館事業を通じて、旧福岡藩や大社教関係者をはじめ多くの賛助者を得た。『福岡図書館報』に並ぶ2500人近い同館会員名簿が、その広がり物語る。その特別会員の中には、尊福が明治18年の福岡巡教で大社教会副取締に任命した早良郡の石橋善次郎や、近世は黒田藩の藩医で、同35年に九州初の私立病院を開いた原三信（はらさんしん）（代々の襲名）、博多湾鉄道や第一徴兵保険の社長を歴任し、博多随一の富豪とも呼ばれた太田清蔵の名もある。

玄銀は明治35年『福岡図書館報』第1号の巻頭に、尊福が開館を喜んで詠んだ歌「千萬ちよろずの書見る窓の明くれに国の光もさしやそふらむ」を載せた。図書館内に和歌の「八雲会」を作って会主も務めた玄銀は、先祖伝来の大社御師の経験を受け継ぎ、歌や文芸を通じて現地の人々と

良好な関係を築こうとしたのだろう。玄銀が図書館の横に農業館を併設したのも、大社の祭神（大国主大神）が農耕神としても信仰されてきた関係で、殖産や農業向上に取り組んできた近世以来の御師たちの経験を受け継いだものと思われる。

列島各地の檀所と出雲をつなぐ御師たちは、諸国の動向を把握し、時代の変化に素早く対応できた。第12代廣瀬信睦が懇意だったという長崎の高木作右衛門は、長崎開港以来の頭人・町年寄で、朱印船貿易で財をなした豪商だった。江戸中期からは長崎代官も兼任し、舶来の書籍など世界文化の輸入も一手に引き受けている。福岡図書館の蔵書の一部を引き継いだ九州大学の廣瀬文庫には『黒田御用記』など旧福岡藩の古記録や、江戸から長崎までの陸路・海路を描いた絵巻物など名所図絵、朝鮮の古典小説『春香伝』など海外の書籍もあった。玄銀は『福岡



【図13】 福岡市荒戸町時代の大社教福岡分院。向かって左が本殿、右が図書館（『風調』23号、大正元年12月）



【図14】 現在の出雲大社福岡分院。1973年に福岡市西区今宿町で再建。

図書館報』第3号の「図書館」で、英仏の国立図書館の蔵書を賞賛しつつ、最先端は米国だと詳しく分析している。近世から出雲と筑前の間を往来し、長崎で海外の情報にも触れていた御師の家系ならではの視野の広さだろう。

廣瀬家と吉田家の縁は、玄銀が一畝の次女花子を後妻に迎えるなど、明治期一層深まった。博多の櫛田、十日恵比須神社なども兼務する玄銀に代わり、図書館の実務は司書役の一畝が担う。いっぽう玄銀は吉田家の旧家臣で職がない者がいると、賃金を出して「福岡県地理全書」など書物を筆写させ、蔵書に加えるなど、先祖伝来の吉田家への心配りを忘れなかった。長年にわたる出雲の廣瀬家と筑前の吉田家の縁が、福岡における近代図書館の礎を固めたともいえよう。

玄銀没後、福岡図書館の本館は一畝と親しかった古賀得四郎が買い取って移築し、福岡市千代町（現博多区千代）の古賀胃腸病院の病棟として使われ、1991年まで残っていた。福岡市総合図書館展示の瓦は、1986年1月、古賀元晁氏寄贈とある。大社教福岡分院は福岡城の

堀端、福岡市荒戸町71番地（現中央区大手門）という便利な場所にあり、後に新聞記者（朝日新聞主筆・副社長）、政治家（自由党総裁）となる緒方竹虎も中学生時代、熱心に通ったという<sup>20)</sup>（図13）。福岡の文化発展と人材育成の契機として果たした役割は大きい。同分院は1945年の福岡大空襲で全焼したが、1973年に同市西区今宿で出雲大社福岡分院として再建された。現在は玄銀の曾孫、廣瀬正彦氏が分院長を務めている（図14）。

## 注

- 1) 三池賢一「福岡県立図書館 廣瀬文庫資料」『ふるさとの自然と歴史』215号、1989年11・12月、20頁ほか。
- 2) 以下、特に注がなければ、本稿における福岡図書館の実態に関する記述は、以下の文献に基づく。筑紫豊「私立福岡図書館史」『図書館学』第6号、1958年、215～227頁。伊藤達也「（私立）福岡図書館についての一考察」(1)(2)『図書館学』86号、2005年、44～52頁、同88号、2006年、1～7頁。廣瀬高嘉編『福岡図書館報』第1号、1902年10月、福岡図書館、1～54頁。同第2号、1903年1月、1～30頁。同第3号、1904年1月、1～25頁。
- 3) 第13回九州沖縄八県連合共進会福岡県協賛会編『福岡県案内』1910年3月、127～128頁。
- 4) 福岡県教育委員会編・発行『福岡県教育百年史』第5巻通史編（I）1980年、981～982頁。
- 5) 西日本新聞トップクリエ編『博多学200』増補改訂版、西日本新聞社、2014年、339頁。
- 6) 福岡市市長室広報課編『ふくおか歴史散歩』第六巻、福岡市、2000年、133～134頁。
- 7) 九州大学百年の宝物刊行委員会『九州大学百年の宝物』丸善、2011年、150～151頁。西日本図書館学界編『九州図書館史』千年書房、2000年、164～165頁。

- 8) 原武史『く出雲>という思想—近代日本の抹殺された神々』講談社、2001年、6～7頁。Lafcadio Hearn: Glimpses of Unfamiliar Japan, 1894. (DODO Press. 2007), pp.138-139.
- 9) 千家尊福について詳しくは拙著『千家尊福と出雲信仰』(筑摩書房、2019年)を参照。
- 10) 千家尊福『出雲大神』大社教本院、1913年、489～490頁。
- 11) 平岡松彦「出雲大社博覧会」『大社の史話』第22号、1978年4月、2～5頁。藤井貞文「千家尊福公の事績」『神道学』第57号、1968年5月、3～5頁。
- 12) 出雲大社書籍縦覧所に関する記述は以下の文献に基づく。『大社町史』出雲市、2008年、561頁。藤岡大拙「松江書籍縦覧所について」『島根女子短期大学紀要』24号、1986年、25～35頁。石井由香里「出雲大社文庫について」『大社の史話』第190号、2017年3月、1～3頁。
- 13) 岡宏三「近世の出雲大社と御師の布教活動」『出雲大社の御師と神徳弘布』島根県古代文化センター、2005年、189～209頁。岡宏三「出雲のダイコクさんと大社御師」『大社の史話』第174号、35～44頁ほか。
- 14) 以下、特に注がなければ、本章における吉田家及び同家と廣瀬家の関係をめぐる記述は以下の文献に基づく。「出雲大社神主広瀬家由緒書」(九州大学附属図書館吉田家文書、文化15=1818年2月5日)。「大社教福岡分院録事」(廣瀬高嘉編『福岡図書館報』第2号、明治36年1月1日、福岡図書館、25～26頁)。檜垣元吉監修『吉田家伝録』大宰府天満宮、1981年、序文。家臣人名事典編纂委員会『三百藩家臣人名事典』第7巻、新人物往来社、1989年、66～68頁。西日本文化協会編『福岡県史』通史編 福岡藩 文化(下)、福岡県、1994年、23～24頁。注2) 筑紫豊「私立福岡図書館史」『図書館学』第6号、5～6、14頁。
- 15) 石塚尊俊編『出雲信仰』雄山閣、1986年、96頁。
- 16) 以下、特に注がなければ、本章における明治18年の千家尊福、及びその後の大社教教導職による福岡県内巡教に関する記述は、以下の文献に基づく。出雲大社教教学文化研究室『御生誕百五十年記念—千家尊福公』出雲大社教教務本庁、1994年、66～74頁。千家尊福「筑紫の道ゆきふり」(千家尊福『出雲大神』増補版、大社教本院、1921年)812～824頁。大社教本院『大社教雑誌』第1号(1886年5月)4頁、第3号(同年7月)3頁、第4号(同年8月)5頁、第6号(同年10月)5頁、第22号(1888年2月)8頁、第31号(同年11月)20頁、第33号(1889年1月)8頁、第35号(同年4月)7頁。
- 17) 江藤正澄に関する記述は以下の文献に基づく。筑紫豊編著『江藤正澄の面影』秋月郷土館、1969年。江藤正澄『大社教大教正江藤正澄履歴書』1909年。注14)『三百藩家臣人名事典』第7巻、12頁。
- 18) 宮崎元胤については以下の文献を参照。朝日新聞福岡本部編『博多町人と学者の森』1996年、149～151頁。西日本文化協会編『福岡県史』通史編・福岡藩・文化(上)1993年、311～333頁。
- 19) 大社教本院編『風調』7号、風調社、1902年、68頁。
- 20) 注5)『博多学200』増補改訂版、339頁。橋詰武生『明治の博多記』福岡地方史談話会、1971年、241～242頁。井上忠他『福岡・博多の町名誌』福岡市都市計画局、1982年、114～115頁。